



シンポジウム

福島原発の収束・廃炉を考える ～私たちに何ができるか～

9月27日(土)午後1時半から4時半まで、早稲田大学早稲田キャンパス15号館において、シンポジウム「福島原発の収束・廃炉を考える～私たちに何ができるか～」を開催しました。

パネリストには各界から多彩な顔ぶれがそろい、福島第一原発を取り巻くさまざまな状況と問題について意見を交わしました。

シンポジウムではまず岡本氏が福島原発行動隊について紹介した後、他のパネリストから様々な興味深い発言がありました。

えりのあ氏は、仮設暮らしをしている故郷の双葉町の友人たちの思いを歌で発信していきたいと語り、岸井氏はシルバー世代が中心になっているご自身のNPO活動を紹介しました。

吉岡氏は「100年先までを見通して、廃炉作業という被ばく労働にあたる人材を確保する」課題の重要性を指摘しました。名嘉氏は「健康診断、体力テスト、技術分野での仕分けをすれば原発行動隊にも色々な活用の仕方がある」と行動隊にエールを送りました。増田氏からは、

行動隊には、現場で働いている人たちを「親として」支えて欲しい、また若手を指導・育成することを期待しているとの発言がありました。

シンポジウムには北は北海道、南は沖縄にいたるまで日本各地から170名の参加者があり、パネリストのお話熱心に耳を傾けました。

このシンポジウムについては詳しい報告書を公表する予定です。

パネリスト

えりのあ (シンガーソングライター)
岡本達思 (公益社団法人福島原発行動隊)
岸井成格 (ジャーナリスト)
名嘉幸照 (株式会社東北エンタープライズ会長)
増田尚宏 (福島第一廃炉推進カンパニー・プレジデント)
吉岡齊 (元政府事故調査委員会委員・九州大学教授)

ファシリテーター

吉田悦花 (NPO法人神田雑学大学理事長)

総司会

青田いずみ (女優)

参加者の声

●「シニア」のコンセプト

内田隆

都合により山口県に引っ越して以来、今回タイミングが合い集会に参加できました

会場には、女子学生らしきグループや職人ファッション男子グループなど、若い参加者も比較的多かったように見受けられました。早稲田大学という場所柄なのか、それとも最近の傾向なのでしょう？

トーク内容としては、まず吉岡氏の「長期的視点ではシニアという概念がなくなる」が印象に残りました。

20歳の青年が60歳にもなる40年という長い月日は、原発事故収束のタイムスケールにあっては「わずか」40年という月日となり、一方で今年も、来年もその年にシニアという年代は出続ける。「シニア行動隊」というコンセプトは、60歳以上という限定したものではなく、普遍的なものとなる。

廃炉カンパニーのトップ増田氏と、協力企業の社長の名嘉氏の、同じく現場の実働を仕切る立場でありながらも立ち位置の違いからくる見解の相違は興味深かったです。

その名嘉氏ですが、しばらく前に「福島原発～ある技術者の証言」を読んだのですが、ご本人は思ったより若々しい感じでちょっとビックリしました。

●若い人たちに聞いてほしかった

田中紀枝

もっともっと沢山の若い方たちに聞いてほしかった。とても残念です。

■シンポの「裏方」として

三浦秀和

私は隊の発足当初から賛助会員として活動に加わり、福島でボランティアなどしていましたが、収束作業に加われないばかりか、原発容認だ脱原発だという議論を繰り返すのに辟易して集まりから足が遠のいていました。



そんな今年4月、理事杉山隆保氏の電話を受けました。行動隊は、福島第一原発の収束作業（被ばく労働）に就く道が見えず、憂慮される状態だと云うのです。

そこで、既に病床にあった初代理事長山田恭暉氏の初志と原点に立ち返り、これまでの行動隊の活動を総括し、現状を把握し、今後の活動の指針を定めるために、連絡会議でシンポジウム開催を提案したところ承認されて、山田前理事長も了承されたので、シンポジウムの企画立案段階から加わって協力してほしい、という依頼でした。

杉山氏が、私を指名したのは、多分演劇制作者としてのスキルに期待してのことだったでしょうが、私の本音を言えば、老練な皆さんの議論をまとめて企画を形にするのは想像以上に大変なことになると感じ、荷が勝つと思いました。しかし、私は依頼を請けることにしました。

「他人事ではない」…吉川さんの言葉、深く身に浸みます。出席者の個性が際立っていて、自然体の彼らの発言が穏やかでありながら強く訴える力を醸し出していました。

翌日のTBSサンデーモーニングで岸井氏がシンポジウムの出席に触れ、「福島原発の収束・廃炉について勉強をし、その困難さを改めて思い知った…」とおっしゃってられました。彼のような発信力のある方の感想、とても嬉しく思いました。

東電増田氏の真摯でかつ分かりやすい説明が妙に清々しく、事故以来持ち続けてきた東電への不信が少し薄らぎました。行動隊の将来にもわずかに光が射した感のあるシンポジウムでした。

ノーベル賞の受賞のニュースで巷が湧いています。廃炉の技術も研鑽を重ねて構築の折にはノーベル賞ですね。若い方たちにそんな夢に向かって勉強してほしいと願わずにはられません。

●廃炉ビジネス・モデルに感銘

清光正孝

福島原発行動隊主催の「福島原発の収束・廃炉を考える」～私たちに何ができるか～に参加し、特に感銘を受けたのは、現在の収束・廃炉作業を通じ世界の「廃炉ビジネス」モデルにすべきという提言でした。

3・11原発事故は、相次ぐ水素爆発によって原子炉建屋が吹っ飛び、大気中に大量の放射能が放出され、メルトダウンによって溶け落ちた核燃料がどこにあるのかさえわからないレベル7というチェルノブイリと並び史上最悪の原発事故となりました。

これから先何十年、何百年という気の遠くなるような収束・廃炉作業が続きます。

5月上旬に行われた第1回から、13回に及んだプロジェクト会議や個々の打ち合わせは、毎度議論百出し、論点は拡がり、常に新たな資料や視点が持ち込まれ、話が、そもそも論に戻ることも度々でした。

要するに、発足当初の暴発阻止の“行動”と、行動隊の“行動”の違い、その時々での現状認識の違いからくる齟齬が原因だったのでしょう。しかし、これらの議論自体は、今回の企画の副産物になったと思います。

事実、進行台本のたたき台が提案されると、一挙に認識が一致し、イメージが共有され、枚田繁氏から元東電社員吉川彰浩氏の文章が紹介されると俄然構成が明確となり、それを高橋正明氏が丹念に纏めて下さいました。

当日は高校生を含む170人以上の参加で盛況でした。

MCの青田いずみ氏のテキパキとした仕切りと、臨機応変に進行するファシリテーターの吉田悦花氏に助けられ、張りつめた緊張感の中にも、和やかな雰囲気が漂い、パネリストの皆さんも、忌憚なく発言されたり、思わず目頭を熱くされたりして、立場の違いこそあれ、まずは、福島を消そう、福島をかたづけようという想いを共有した上で、私たちに何ができるのかというヒントを数多く引き出すことができた催しになったと思います。

行動隊はこれを機に新たなステップに進むでしょう。



写真は左から、進行役の吉田悦花、パネリストのえりのあ、岸井成格、増田尚宏、吉岡斉、名嘉幸照、岡本達思の各氏

この原発事故の収束・廃炉作業から「廃炉研究」の拡充、「廃炉ビジネス」へと積極的投資すべき、住民同士の分断・対立をなくすために民度を高め、いかに協力していくかが福島事故の教訓であるという吉岡教授、名嘉会長の提言を受け止め、シニア世代の一人としてこれからも福島とかかわっていきたいと思います。

●毎年やっていただきたい

篠原浩一郎

不便な会場にもかかわらず満員の来場者には感激しました。ここまでこぎつけた関係者の皆様のご苦勞に敬意を表します。

パネリストの選択もバラエティに富んでいて当初はどうなるかと心配でしたが、いずれも自分の分野をもって福島原発収束を真剣に願っているメンバーばかりですばらしいと思いました。

司会の青田さん、ファシリテータの吉田さん、登壇の

えりのあさんの3人の女性によってシンポジウムが言いつばなしではなく、相互に考えるめずらしいシンポジウムになったように思います。彼女たちによって、増田廃炉カンパニー社長、岸井さん、名嘉さん、吉岡さん、岡本理事と男性登壇者が一層輝いたように思います。

これから長期にわたって収束に我々日本人がどうかかわっていくかを真剣に考えさせる場になったのは大成功でした。このシンポジウムを毎年やっていただきたいと希望します。

一つだけ注文したいのは、次回から同時通訳を入れて海外メディアにも取材参加を呼び掛けてはいかがでしょうか。この議論を日本だけにとどめておくのはもったいないと思います。

収束作業者の被ばくを減らすという長期の取り組みの中にどう行動隊の活動を位置付けるのか？ 何らかの行動が登壇者や来場者から求められていると感じました。



●自分にできることを実践する

中島賢一郎

増田プレジデントが東電の立場を保ちつつも廃炉カンパニー＝現場の長として、生き生きと実態と悩みを、エリノアさんは分断化され孤立した浜通りの友人たちの苦しみを（まだ歌を聞いていません、ゴメンナサイ）、名嘉さんは福一に携わり続けてきた技術者としての誇りと危惧、断念と希望を語る。岸井さんはジャーナリストとして在り続けるFUKUSHIMAを風化させない決意を語り、吉岡さんは正しく悲観する。それらを束ねる言葉としてAFW (Appreciate FUKUSHIMA Workers) の吉川さんの言葉が朗読された。

まさきに参加してくれた活動家でもない年若い（とはいっても青年とは言えない）友人の感想をもって私自身の感想とします。

「立ち位置の違うシンポジストから発言される内容が、予定調和ではない内容であったので、楽しく聞くことができました。私が色眼鏡なしで得た結論は（…）今回の災害による放射能汚染を収束させ、難しいからといって避けてしまうのではなく、原発の“廃炉”に向けて、もっと自分でできること、どんな小さなことでも実践することが必要なのだと思いました。

そして、今この時点でも福島原発で防護服に全身を包まれながら収束に向けた作業にあたっているたくさんの人に感謝をしなくてはならないなと思いました。」

●興味深い「聴講」でした

渡辺洋

吉川さんの文章の朗読が予想外でしたが、私の感想で修まりが良かったことは、次回院内集會に吉川さんご本人が発表されること。

シンガーの”えりのあ”さんは明るく元気なお声、途中からトチ丸くん体操を全員でしたくなりました。

毎日新聞の岸井さん（70歳）ご自身は植林活動での意気込みを感じ、翌朝のテレビで当シンポジウム参加を報告されてたことは安心です。

東京電力の増田さん（57歳）に質問が集中しましたが、情報を隠す気も、隠していません。

そして原発の現場作業に直接従事している人に「エールを贈りましょう」に私は共感。

九州大学の吉岡さん（61歳）からは原子力市民会議のPRがあり今後も拝見してみたいと思いました。

協力会社の名嘉さん（72歳）は耳がご不自由なのを休憩時間に伺って、筆談・要約筆記・字幕などの情報保障の必要性を年々より強く感じます。

行動隊の岡本さんは64歳で原発の仕事に応募され続けているパワーに感銘しました。

40年前、高校時代に学園祭に見学に来た記憶から、今、黒板のある教室での聴講はとても意味深く、有り難うございました。

●えりのあさんから

先日は福島原発行動隊のシンポジウムでたいへんお世話になりました。ありがとうございました。

パネリストとして参加できたことは自分にとってもすごく良い経験になりました。

今回のシンポジウムは、私にとって、支援活動をする上で、震災後から振り返り、今後どういう支援ができるのかを改めて考える良い機会になりました。

絶対に風化させてはいけないし、これから長く見ていく中で、若い世代にも多く呼びかけていきたいと強く感じました。

今後ともよろしくお願ひいたします。

■第35回院内集會を開催しました

9月18日（木）午前11時より、参議院議員会館B107号室にて35回目の院内集會を開催しました。来場の国会議員は櫻井宏氏（衆・自民）と階猛氏（衆・民主）。

議題は、8月18日に立ち上げられた「原子力損害賠償・廃炉等支援機構」による放射能汚染水対策をはじめ廃炉に至るまでの支援事業はどのように進められるのか。

そのために呼び出した関係担当官は、資源エネルギー庁電力・ガス事業部から原子力発電所事故収束対応室補佐の中井康裕氏と政策課係長の福澤秀典氏、原子力損害賠償・廃炉等支援機構から主査の室徳圭氏と廃炉総括グループ運営チーム調査役の山形宏之氏。

まず山形氏より「廃炉等支援業務の基本的機能」「福島第一廃炉・汚染水対策の役割分担」「廃炉等支援業務における当面の課題」「廃炉等技術委員会委員」について30分にわたる説明があり、質疑応答に入りました。

質問に立った集會出席者は延べ17名、いずれも質問が半分、意見と要望が半分という内容で、機構と政府・東電（廃炉カンパニー）との関係・役割、三者間の位置づけ、司令塔としての機構の権限、機構の職員数・配置・トップの任期・予算、はては上記4名の担当官の経歴など多岐にわたりましたが、主要な論題になったのは廃炉事業のための人材の確保・育成に関する問題です。

機構はこの「人材」を主として研究者・エンジニアと認識しているふしがあり、作業員として事故収束事業に参入することを目的とする行動隊とのズレを感じる部分もありました。

とはいえ老人集団からの的確な質問や指摘に、若さのまばゆい担当官諸氏もそれ相応に誠実に応答されたことに好感を覚えました。「重要なご指摘なので持ち帰って検討課題にする」という旨の答弁もしばしばあり、それが口先に終わらないことを念じ、今回の院内集會が行動隊と機構との今後の関係の緒になることを願ってやみません。（H記）

